



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	利用者の主体性を促す展示に関する研究：都道府県立博物館の常設展示を事例として〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	魏, ブン君
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第16483号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94899
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Wenjun_Wei_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名：魏 雯君

学位論文題名

利用者の主体性を促す展示に関する研究－都道府県立博物館の常設展示を事例として－

・本論文の観点と方法

本研究は、都道府県立歴史博物館の常設展示における、利用者の主体性を促す展示手法の成果と課題を明らかにすることを目的とする。

かつて、一方的にメッセージを伝える展示が主流であった都道府県立歴史博物館は、2000年代以降、利用者との交流を重視し、利用者の主体的な理解を促す方向へと変化してきた。しかし、この変化を検証する研究、すなわち都道府県立歴史博物館における主体性を促す展示の取り組みや成果を明らかにし、その課題を考察する研究は十分に蓄積されていない。先行研究の検討によれば、都道府県立歴史博物館の展示活動に関する研究は、主に展示内容、展示構成、展示手法の変化に焦点を当てたものが中心である。また、都道府県立歴史博物館で実施している来館者調査は、利用者の属性、興味・関心、満足度や不満点を把握することを目的としたアンケート調査が主流となっており、これらの調査は利用者の記入意欲に依存しているため、情報に偏りや不足が生じる可能性が高い。さらに、展示の意図を無視した恣意的な理解への対応が課題として指摘されているが、都道府県立歴史博物館においては、この問題に関する議論はほとんど行われていない。したがって、本研究では、都道府県立歴史博物館が導入した主体性を促す展示の内容を明らかにし、博物館が想定した効果と利用者の実際の利用状況との間に差異が存在するかを検証する。その結果をもとに、主体性を促す展示の改善に向けた方策を提案する。

本研究の方法は次の通りである。まず、常設展示のリニューアルをアプローチの出発点として、リニューアル方針やリニューアル前後の変化に関する文献調査を行い、都道府県立歴史博物館における主体性を促す展示の変化と現在の取り組みを明らかにする。次に、博物館と利用者の2つの視点から、主体性を促す展示の成果と課題を検討する。具体的には、都道府県立歴史博物館が公開している来館者調査報告をもとに、博物館が認識している問題点を整理する。併せて、北海道博物館（札幌市）での来館者調査を通じて、主体性を促す展示の実際の利用状況を明らかにする。最後に、利用者の先入観や過去の博物館経験が展示観覧に影響を与えることを考慮し、北海道博物館で収集した来館者調査データをもとに、利用者の観覧タイプとその影響要素を分析し、主体性を促す展示の改善に向けた方策を提案する。

・本論文の内容

序章では、本研究の背景、目的、方法などについて述べた。また、先行研究の検討と本研究で使用する用語の定義も行った。

第1章では、都道府県立歴史博物館における主体性を促す展示の変化と現在の取り組みを明らかにするため、都道府県立歴史博物館の常設展示リニューアルに関する文献調査の結果を記した。まず、リニューアルの経緯を公開している都道府県立歴史博物館12館の14事例を調査対象として選定した。次に、これら14事例に関するリニューアル報告書や関連論文などの文献資料を収集した。さらに、収集した文献資料からリニューアル方針やリニューアルにおける展示内容・展示構成・展示手法の変化に関す

記述を整理した。最後に、その整理結果から、利用者向けの取り組みに関する記述を抽出した。その結果、都道府県立歴史博物館が導入した主体性を促す展示手法を次の7の取り組みに分類した。① 利用者にとって身近な展示内容の提供、② 利用者が五感を活用した体験型展示の多用、③ 利用者が選択可能な展示内容や動線、解説の提供、④ 利用者が体験学習できる常設空間の設置、⑤ 利用者が博物館職員との対話や利用者同士の対話ができる常設空間の設置、⑥ 利用者が自ら展示を開催できる空間の設置、⑦ 利用者が展示リニューアルへの意見提示が可能な仕組みの整備である。

第2章では、第1章でまとめた7つの取り組みの効果や問題点を博物館の視点から検討するため、都道府県立歴史博物館における来館者調査に関する文献調査の結果を記した。まず、第1章で調査対象とした12館の博物館が実施した来館者調査に関する文献資料を収集した。また、収集した資料から、博物館が認識していた7つの取り組みの問題点を整理した。その結果、「選択可能な展示動線」は、リニューアル計画段階では自由的な学びを促す取り組みとして位置付けられていたにもかかわらず、リニューアルオープン後には意図通りに利用されていないことが、顕著な問題として浮き彫りとなった。

第3章では、第1章でまとめた7つの取り組みの効果や問題点を利用者の視点から検討し、さらに「選択可能な展示動線」が意図通りに利用されていない要因を明らかにするため、北海道博物館で実施した来館者調査の結果を記した。まず、北海道博物館における既存の来館者調査の問題点を整理し、北海道博物館を調査地として選定した理由について述べた。次に、来館者調査の調査方法、調査日程、調査者、調査結果を説明した。最後に、調査結果を基に考察を行った。調査では、トラッキング調査とインタビュー調査を併用し、利用者が北海道博物館の常設展示室に入ってから出るまでの観覧順路と滞在時間を記録し、常設展示室を出た直後にインタビューを実施した。調査は27日間行われ、78件のサンプルが収集された。その結果、「選択可能な展示動線」と利用者が博物館職員との対話や利用者同士の対話ができる常設空間である「交流ゾーン」の設置目的や利用方法を理解している者は全体の半数にとどまることが明らかになった。その要因として、博物館側の説明が不十分であることに加え、利用者が展示の利用方法を改めて学ぶ必要性に気づいてない点が挙げられる。これは、都道府県立博物館の過去の常設展示が同質化し、固定化していた傾向に起因していると考えられる。

第4章では、利用者の先入観や過去の博物館経験が展示観覧に与える影響を考察するため、北海道博物館における利用者の観覧習慣に関する分析の結果を記した。まず、本章で使用する分析手法「事例・コード・マトリックス」表のタイプ分け分析法について、その方法と特徴を説明した。次に、北海道博物館で収集したインタビュー調査のテキストデータを、タイプ分け分析法で分析した。その結果、北海道博物館の利用者には、① 情報を体系的かつ効率的に得ることを目的に博物館を利用するタイプ、② 感情的な体験を求めて博物館を利用するタイプ、③ 自分が持っている固有認知と異なる考えを知るために博物館を利用するタイプの3つの観覧タイプが確認された。最後に、これら3つの観覧タイプの特徴や影響要素を考察し、展示改善に向けた2つの方策を示した。1つ目は、資料を解釈する能力のみならず、博物館のサービスを利用するリテラシーを向上すること。2つ目は、利用者の意識変化を記録し、それを博物館にフィードバックできる仕組みを整備することで、交流空間を博物館の「本来の価値」を発見する場として活用することである。

終章では、各章の調査結果を踏まえ、ソーシャルメディア時代における歴史博物館の展示活動の役割を再認識することと、来館者研究が資料研究と同様に重要視されていない現状を、現在の博物館学研究的な重要な課題として提起した。